

Economic Indicators

定例経済指標レポート

テーマ：貿易統計（12月）

発表日：1月26日（水）

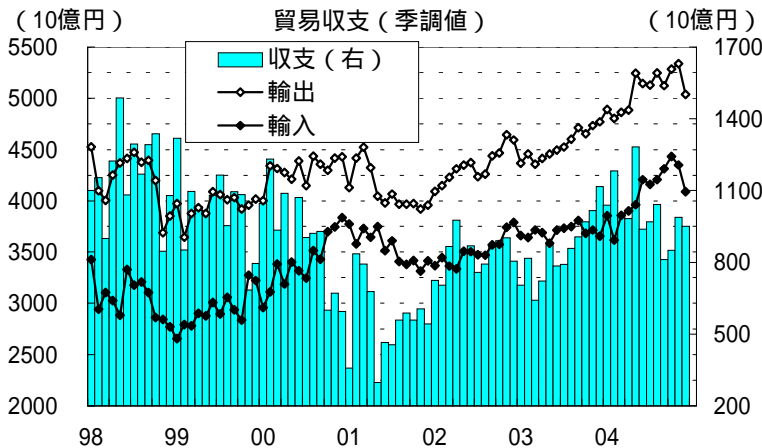
～10 - 12月期の外需寄与度は小幅マイナスか～

(No. J - 112)

第一生命経済研究所 経済調査部

担当 副主任エコノミスト 新家 義貴

TEL: 03-5221-4528



(出所：貿易統計・財務省)

(10億円)	季調値			原数値
	貿易収支	輸出	輸入	貿易収支
03年12月	1117	4772	3655	1122
04年 1月	1038	4892	3854	500
2月	1183	4802	3619	1402
3月	1003	4862	3860	1123
4月	983	4885	3903	1076
5月	1281	5244	3963	931
6月	939	5145	4207	1143
7月	970	5130	4160	1134
8月	1042	5248	4206	573
9月	811	5124	4313	1232
10月	851	5284	4433	1155
11月	988	5338	4350	600
12月	950	5039	4090	1142

(出所：貿易統計・財務省)

前年比	輸出金額	輸出価格	輸出数量指数				輸入金額	輸入価格	輸入数量指数			
			全体	対米	対EU	対アジア			全体	対米	対EU	対アジア
03年12月	8.5	3.9	12.9	0.0	13.4	13.0	1.7	6.9	9.2	14.1	3.8	13.3
04年 1月	11.3	1.6	13.1	0.2	11.1	17.0	0.8	4.7	5.7	29.8	1.2	8.3
2月	10.3	1.6	12.0	5.8	8.6	6.8	0.9	3.9	3.1	21.1	3.7	5.5
3月	13.2	0.8	14.2	7.1	14.2	8.6	12.3	4.5	17.6	5.9	14.3	21.3
4月	10.8	2.1	13.2	3.9	6.2	10.2	6.6	3.3	10.2	24.5	2.3	11.9
5月	9.8	0.6	10.5	6.4	7.3	7.5	5.0	5.3	0.3	45.3	3.9	4.6
6月	19.4	1.3	17.9	9.2	18.4	15.1	15.5	5.0	10.0	26.1	10.9	12.5
7月	14.3	2.2	11.8	0.3	11.1	12.5	8.3	4.4	3.7	0.2	3.5	7.0
8月	10.5	0.5	11.0	4.5	7.8	11.8	18.6	4.8	13.1	23.2	6.3	14.8
9月	12.4	0.5	11.9	7.2	6.8	16.6	12.5	8.5	3.7	17.2	2.7	8.9
10月	11.7	6.2	5.1	3.7	1.1	9.8	12.7	12.0	0.6	40.7	5.4	2.2
11月	13.4	7.6	5.4	2.8	3.3	13.6	28.0	11.8	14.5	10.7	11.7	16.0
12月	8.9	6.1	2.6	0.4	3.3	6.8	10.9	7.9	2.8	17.5	0.4	4.5

輸出は横這い傾向からは脱せず

2004年12月の貿易黒字額（原数値）は11221億円（前年比+1.8%）と、ほぼ市場コンセンサス（11,479億円、レンジ10,209～12,750億円）通りの結果となった。前年比では2ヵ月ぶりの増加となったが、これは輸入金額の伸びが前月から大幅に鈍化したことが主因だ。11月には営業日数が多かったため輸入額が押し上げられていた反動が出たことに加え、原油価格がいったん下落していたことが影響した模様だ。なお、季節調整値をトレンドとしてみれば、原油価格の高止まりによる輸入金額の増加と輸出の伸び悩みといった要因から、貿易黒字は2004年春頃をピークにこのところ若干減少傾向で推移している状況に変化はない。当面、こうした状況が続くだろう。

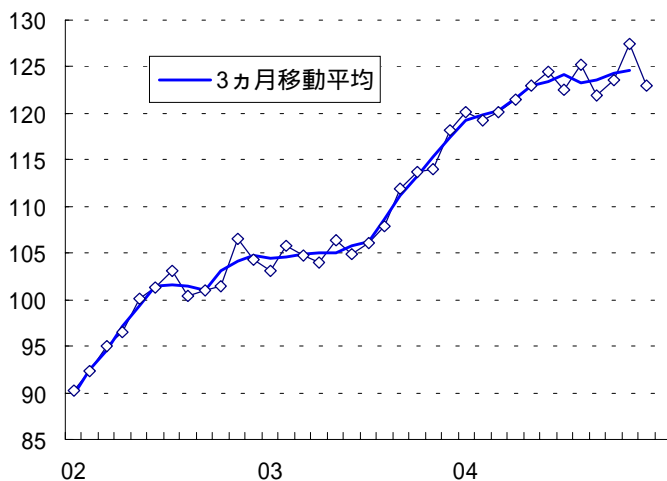
最も注目されていた輸出動向に関しては、今月は足踏みとなった。実質輸出（輸出金額/輸出物価）は季節調整済み前月比 3.5%と、前月の上昇分（同+3.2%）をすべて吐き出している。10、11月と実質輸出は

2ヵ月連続で上昇していたため、輸出が既に増加傾向に入ったとも思われたが、今月はやや期待外れに終わった格好だ。内訳では、全般的に減少しているが、電気機器や一般機械の落ち込みが特に大きくなっている。また、地域別にみても全般的に落ち込んでいる。やはり、世界的なIT関連財の在庫調整が輸出の頭を押さえているという構図には、現時点で変化はないようだ。輸出は、夏場以降の横這い傾向を未だ脱しきれてはいないという評価が妥当だろう。先行きについても、引き続きIT関連財輸出が低調に推移すると予想されることに加え、鉄鋼では、供給能力の不足から国内供給を優先していることなどから、輸出は当面、低調な推移を続けるとみられる。また、輸出に対して先行性があるとされているOECD景気先行指数も足元まで悪化しており、1-3月期の輸出も伸び悩むことを示唆している。

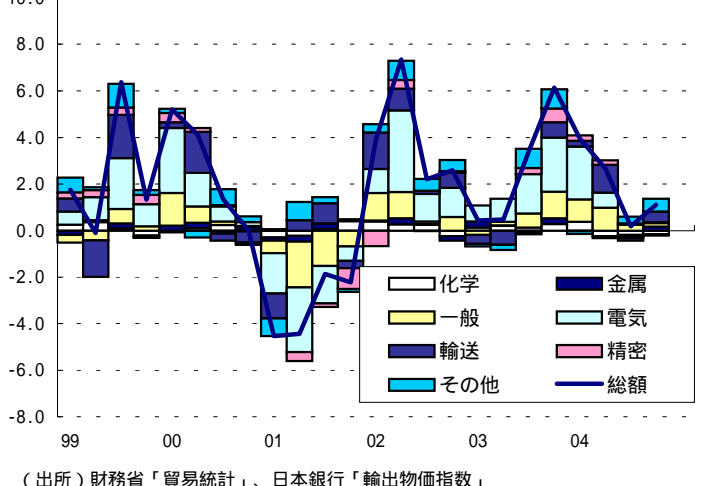
もっとも、輸出の前提となる海外経済の動向を見渡すと、中国経済は引き続き高成長となっていることに加え、米国経済に関して、鈍化はするものの、潜在成長率(3~3.5%程度)並みの成長は今後も期待できるだろう。このように、外部環境的にはそれほど悪いわけではないため、IT関連財の調整にさえ目処がつけば輸出は増加していく状態にある。実際、足元では、IT関連財以外の財は(元々あまり増加していなかったという面もあるが)さほど落ち込んでいるわけではない。このため、輸出は当面伸び悩みが続くものの、IT関連財の調整に目処がつく春~夏以降には、輸出は再び増加傾向が明確になると思われる。

2000年 = 100

実質輸出 (季節調整値)



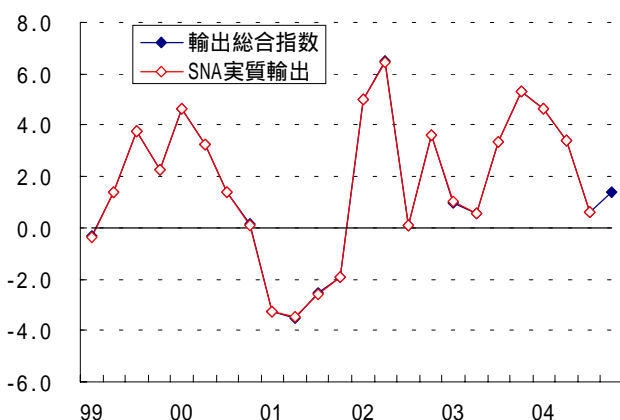
財別実質輸出 (全世界、前期比)



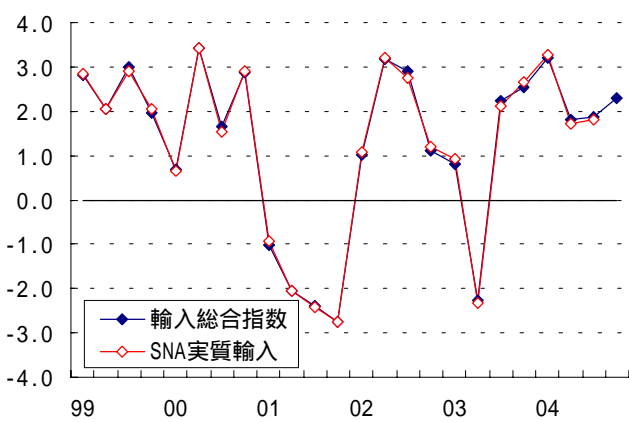
(出所) 財務省「貿易統計」、日本銀行「輸出物価指数」

10 - 12月期の外需寄与度は小幅マイナスが予想される

輸出総合指数とSNA実質輸出 (前期比、%)



輸入総合指数とSNA実質輸入 (前期比、%)



内閣府(経済財政分析担当)では、財の輸出入にサービスや直接購入の要因も加え、SNAと同じ概念に

調整した輸出入総合指数を毎月試算している¹。これと同じ方法で計算したところ、10 - 12月期の実質輸出は +1.4%、実質輸入が +2.3%、外需寄与度は 0.1%ポイントとなった²。外需は、7-9月期に続いて2四半期連続で、GDPに対して押し下げ要因になりそうだ(正式な予測値は、他の12月分の指標を踏まえて改めて公表する予定)。

¹ 輸出入総合指数に用いるデフレーターを連鎖方式に移行して計算したこと等の要因により、現時点で内閣府(経済財政分析担当)から公表されているものとは数値が異なる。

² 輸出入総合指数等の作成方法に関しては <http://www5.cao.go.jp/keizai3/discussion-paper/dp041.pdf> を参照のこと。